アフガニスタン山の学校だより 翼（ばあーる）2023年号　発行：アフガニスタン山の学校支援の会　発行日：2023年12月17日

翼 ばあーる

アフガニスタン山の学校だより ばあーる 2023年号
通算39号

平和を手繰り寄せるために

新校舎で子どもたちと（2015年）

一歩、踏み出す

9月23日、東京都写真美術館で「山の学校支援の会」の報告会が開かれ、100名を超える方々が集まってくださいました。タリバンが首都を武力制圧してから2年がたちましたが、まだ子どもたちは学校に戻れる状況にありません。

政治も経済も壊滅的なアフガニスタンに、もっと世界が目を向けて欲しいと思いますが、ヨーロッパ各国の関心はウクライナとガザに向けられ、アフガニスタンはまるで忘れられてしまったようです。そうした中、ブラジルで私が20年以上も前に撮った先住民の写真展が開かれ、10月21日、サンパウロを訪れました。かつて取材した先住民たちが集まったトークイベントでは、クリカチ族のプルイが「土地確定は認められたが、ブラジル人からの圧迫を受け、私たちはまるで籠の鳥。もっと自由に空を飛びたいのです」と話しました。不寛容と排外主義、そして暴力と憎悪。それが世界を覆っていることを実感しました。それは「自分だけが良ければいい。周りの人も未来のことも関係ない」という共存とは対極にある考えです。

では、私たちは何ができるのか。答えは、それまで自分が関わってきた地域を見守り、活動を続けることで、その悪の連鎖を断ち切るしかないのです。世界で共存を願う人々に気持ちに応えることで、アフガニスタンやパレスチナなど世界の平和も必ず見えてきます。まず、一歩を踏み出しましょう。

アフガニスタン山の学校支援の会代表

長倉洋海

報告会から

アフガニスタン山の学校支援の会代表　長倉洋海

（会場で話したことに加筆しています）

タリバンが全土を掌握して2年。タリバン政権を正統な政権と認知する国はいまだ現れていません。しかし、世界の目が向いていないことをいいことにタリバンは国民へ弾圧を加え、都合がいいように国を操っています。国民にとって、この2年間は大変な苦痛だったと思います。

最初に「山の学校」の現状です。2021年8月、親類などを頼って家族とカブールに逃れた子どもたちはほとんどがまだ戻っていません。一時、タリバンが学校を宿舎としていましたが退去し、現在は閉鎖されたままです。峡谷内の空き家には、パンシール上流の戦闘が続くパリヤンなどから逃れてきた人たちが暮らし、その子どもたち20人ほどに下流の民家でタリバンの教科書を使った授業が行われているとも聞いています。ただ、今もタリバンの地域住民への監視は続き、不当逮捕もよくあるともいいます。

タリバンは中高の女子教育を禁じ、国民の自由を奪って、一体、アフガニスタンをどうしようというのでしょうか、普通の学校を閉鎖し、代わりに聖戦思想を教え込むためにマドラサ（イスラム教神学校）の開校ラッシュを進めています。国民の思想統一とそれに伴う暴力による締め付けが恒常的に続いています。

SNSを含めて報じられた様々な映像を使って、この2年間をスライドで振り返ります。

最初は女子教育の停止にプラカードを持って抗議する女性たちです。学校に来たものの授業は行われず泣き崩れる女子学生や、カブール大学の門の前で一人「授業再開」のプラカードを掲げる女性の姿もあります。タリバンが市民に暴力を振るう姿は日常茶飯事です。抗議する女性に銃で殴りかかろうとする姿や路上で民間人に暴行を加えるシーン、楽器を壊され目隠しをされた音楽家の姿もツイッターにはよく登場しています。家に押し込まれ殺害された元議会議員の女性や、家族の目の前で射殺された医師もいました。会議中に爆弾が炸裂して負傷し放心状態で座り込んだジャーナリストの姿もありました。昨年9月には大学受験セミナーでの爆発があり100名以上のハザラ人女子学生が負傷し、44名が亡くなりました。地方で土地を取り上げられ、村を追われる人たちの姿も忘れられません。

国連機関の報告では、アルカイダとの連携が進み、多くの過激派組織を受け入れている現実も報告されています。兄弟組織とも言えるパキスタン・タリバン運動は政府に宣戦布告し、各地で衝突を繰り返していますが、タリバンが彼らに庇護を与えていることからパキスタンとの関係が悪化、パキスタンは国内のアフガン難民や移民の追い出しを始め、万を超える人々が国境に殺到しています。国内では武力で威圧し、国外との緊張を深めるタリバン。彼らを財政的に支えているのは民主主義を標榜する米国です。毎週米ドル現金を空輸し、その額は2年間で8000万ドルを超えたとアフガニスタンのデジタル新聞「ハシュト・ソブ」（〝午前8時〟の意味）が伝えています。米国は過激派の中でもIS（イスラム国）を最大の脅威と考え、タリバンにその抑え役を期待しているのです。毒をもって毒を制すということなのでしょうが、アフガン国民にとっては悲劇以外の何物でもありません。

学ぶことができない女子学生をイメージしたイラスト（ツイッターから）

私の報告が終わった後、カブール在住の安井浩美さんから最新状況を聞くことができました。安井さんは「600万もの人が国外に逃れ、現在も悪化する経済状況から逃れていく人がいます。〝希望を持って〟とかいうレベルではなく、危機的な状況なのです。治安は良くなったといいますが、人々は食事にもこと欠いています。仕事がない、あっても生活ができない状態です。日雇いの人が半数近くいるのですが、彼らにも仕事がなく、市場には果物も野菜もあるが人々は買うことができないのです。子どもを学校にやれない。食べ物も満足でないことから子どもは栄養失調となり、妊婦は流産するなど健康被害が著しい」とのお話がありました。

そして、安井さんは「このままではアフガニスタンは壊滅します。もう自分たちだけではなんともできません。外国に逃れたアフガン人、そして国外の人も、どうしたらいいかよく考えて行動してほしい」と強く訴えました。

亡きマスードの教育への思いを汲んで「山の学校」支援を始めた私たちですが、当会は教育支援を通して、子どもたち、そして地域の人々が未来への希望を持てるように支援を続けてきました。私たちが撒いた種は今、地面の下に埋れ、その上を暴風雨が吹き荒れている状況ですが、いつか時が来たら必ず芽を出すと信じています。今まで何度かお伝えしましたが、その時が来

れば学校再開と地域復興に全力を尽くす覚悟です。

ただ、それが叶わない今、何をすべきか考え、カブールで地下学校を運営しているグループと接触し、教員の給与支援を行うことを決めました。安全確保のため詳細は明らかにできませんが、以前から親交があり、信頼に足るカウンターパート（相手先）です。対象の学校はカブール市内で目立たないように民家などを順繰りに回って授業を行っています。授業は金曜、土曜をのぞいて週5日。午前中のみで理科系の科目などが中心で、大学で理系授業を受け持っていた女性教師たちが教えています。いま「山の学校の子」を直接、支援することは一部のコンタクトのある生徒や卒業生を除いてできていませんが、この生徒の中に、「学びたい」という気持ちを持ち続けている山の子たちも加わっているかもしれません。仮にそこにいなくても、同じように夢を育む子たちへの支援はアフガニスタンの未来を切り開く一助になるはずです。山の学校が再開できる日が来るまで、その支援を続けるつもりです。この活動にご理解いただければ幸いです。

カブールの地下学校で学ぶ女子学生たち

私たちは諦めません。国内に残って、その日がやってくるのを待つ子どもたち、そして人々とこの国が良くなる日が来ることを祈りつつ、報告会のレポートといたします。

『鉛筆と銃　長倉洋海の眸』ゲストコメント

（お話の一部を抜粋させていただきました）

柳田邦男さん（ノンフィクション作家）

マスードは、真の教育こそが大事で　これから子どもをどう教育していくか、子どもたちの心をどう育てていくか、それがアフガンの未来になるんだということを語っている。それをまさに証明していくように、そのあと20年間の歩みというものを、子どもたちの表情、学校の表情、学びの喜びの顔、子どもたちの欲求、実に見事に生き生きと描かれ、ああ、見事だな、と思った。これがマスードが生きている証なのだと感じました。

梯久美子さん（ノンフィクション作家）

「マスードを魅力的だと思った。『ひとつの出会いがこれほどまでに取材者の人生を変えるのか』ということに驚いた。出会いの凄さ、ここまでの関係を結ぶ凄さを感じた。本当に出会ったものたちに別れはこない」という言葉を思い出しました。

稲垣えみ子さん（元新聞記者）

「人々のハッとするような瞳の輝き。それはきっと長倉さん自身の心の輝きなんだと気付きました。才能とは自分に正直であること、諦めないこと。私はそこに大きな希望を頂きました」

南研子さん（熱帯雨林保護団体代表）

長倉さんが言うように「希望」という言葉に尽きる。諦めない。現地の人が諦めないから私が諦めてどうする、というかんじです。

山根基世さん（フリーアナウンサー）

「美しいものをみせていただいた。一瞬の一期一会が積み重なっている」

角幡唯介さん（作家・探検家）

「子どもたちの学びたいという欲求はとてもピュアで、自分たちのふるさとをもっとよくしたいという想いにつながっている」

報告会参加者の声

約6割の方からアンケートにご回答いただきました。その中からいくつかご紹介させていただきます。

【第一部】長倉代表による「この一年を映像とともに振り返る」

●アフガニスタンの現状はアフガニスタンだけの問題ではなく、アメリカなど世界の国々がかかわっていると理解できました。●女性の厳しい状況に心が痛みました。地下教育への支援を是非実現して欲しい！　●希望と夢に満ちあふれた子どもたちの輝く笑顔と瞳に再び出会えることと、マスード氏の志がアフガニスタンに芽ぶき花咲きほこる日が必ずくることを願い、祈り続けたいと思います。●あきらめない、忘れない、という決意をもって日本から支援していくのが大事ということがわかりました。●タリバンや国を捨てて逃げ出した前政権、米国の身勝手な自国中心主義に、映像を見ながら憤りを感じました。●具体的なアフガニスタンのニュースを軸にお話をしてくれたことで、より「現実」を知ることができたように思います。第一部で現状を把握した上で、第二部の「未来」を指した映画を観ることは、長倉さんのメッセージの「必ず光を見つけて、暗い内容で終わらないように」ということにもつながったように感じました。

【第二部】映画『鉛筆と銃　長倉洋海の眸（め）』

●前半のマスードとの出会いと取材、後半の「山の学校」での活動の運命的なつながりをよく理解できました。長倉さんがまたアフガニスタンに入って活動できる日がくることを念じています。●20年間の山の学校を思い起こし、どんな時も子どもたちが真剣に前を向いて過ごす姿、美しい心に励まされ、過ごしてきた自分があったことも思い返しています。武力で支配されるのではなく、平和の中で心安らかに過ごせる美しいアフガニスタンが再生される道が開かれますように。●アフガニスタンの厳しい自然、その中で素直に生活している人々、しみじみ人間に境界はないと思いました。マスードが今生きていたらと思わずにはいられません。●報道やメディアを目指す若者に特に見てほしい。特に長倉さんの若き日、野心とともに過ごした時期。根気強く物事を見続けることで実現することがある証明だと思う。●長倉さんとお母さんの温かいつながり、長倉さんのマスードへの熱い思い、お二人の人種を越えた絆、村人の家族の深い愛情、子どもたちの笑顔、いずれも忘れられない映像として心に刻まれました。

ムルサルさんのカブール通信

今年も残すところわずかとなりました。アフガニスタンは、タリバン支配から間もなく２年半を迎えようとしています。2023年はアフガン国民にとっても私にとっても試練の年となりました。タリバンは、政権掌握後すぐに女子の高等教育を閉鎖、女性が医療関係以外で働くことも基本的に禁止されました。女性が子供たちと公園に行くことや女性だけで買い物に出かけること、さらには女性用の美容院も公共浴場もジムも閉鎖され女性は自宅で過ごす以外娯楽を家族と共有することさえもできないのが現状です。国内では、女子教育の禁止で就学ができなくなった女性が将来を悲観し自殺するケースが増えています。回復しない経済により、仕事を失い生活に困って自殺する男性も後を絶ちません。

10月には、アフガン西部ヘラートで大きな地震が発生し、２千人以上の犠牲者を出しました。その犠牲者の９割が女性と子供だったことは、いうまでもありません。地震の発生した時間帯には、通常なら仕事や学校に女性や女児は出かけていて地震の難を逃れることができたはずなのです。しかし、タリバンの政策が裏目にでた結果となり多くの犠牲者を出したことは残念でなりません。

今年も厳しい冬が目の前に迫り、山の頂には積雪が見え始めた中でもまだテントでの避難生活を強いられる被災者が国内にはたくさんいます。タリバン政権も避難民キャンプを建設中ですが、十分な支援も受けられず、寒い冬を乗り切れるのか被災者が心配です。さらに隣国パキスタンは、自国で起こる爆発テロ事件をアフガン人の仕業とし、治安回復のためにはアフガン人を排除するという選択を10月初めに突然発表しました。パキスタンの正式な滞在許可証を持たないアフガン人は不法滞在者として強制送還という措置を強行しました。パキスタンの不法滞在者は国内に170万人いるといわれ、その大半がアフガニスタン出身とされています。タリバンの復権を恐れてパキスタンへ逃れたアフガン人も多く、アフガニスタンに戻された場合恣意的な逮捕や拘束、拷問など残酷な扱いを受ける可能性は否めません。国連人権委員会は、パキスタンに対し「人権の大惨事」を防ぐためにも強制送還をやめるように訴えていますが現時点では、状況に変わりはありません。多くのアフガン人が路頭に迷い、国境に押し寄せ国内でも混乱が起こっていることは、さらなるアフガン人の受難といえます。タリバン復権後の経済はいまだに回復せず、国民の半数は、十分に食事をとれないと国連は報告しています。来年こそは、苦難のアフガン人に明るい未来が訪れることを願ってやみません。

11月22日 カブール　安井浩美

『鉛筆と銃　長倉洋海の眸』好評上映中！

９月の東京を皮切りに各地で上映が始まりました。

■今後の上映予定（最新情報は映画公式ホームページ参照）

横浜）シネマリン：12月16日（土）～29日（金）

［2024年］

高知）ゴトゴトシネマ：１月５日（金）、６日（土）

札幌）シアターキノ：１月20日（土）～25日（木）

＊1月20日には長倉代表の舞台挨拶あり。

大阪）高槻城公園芸術文化劇場：２月３日（土）

島根）フクミミ木次：３月23日（土）

名古屋）シネマスコーレ：近日中

松本）シネマセレクト：近日中

鹿児島）ガーデンズシネマ：近日中

■自主上映のご案内

みなさまの街で上映会を開催してみませんか？
このたび、自主上映の受付を開始しました。

映画上映料（レンタル料）

- １回の上映の基本料金 33,000円（税込）
- 入場者数が50名を超えた場合、１人あたり 400円の追加料金
- ２回以上上映の場合はお問合せください。

お問い合わせ　kibou@pan-dora.co.jp まで
メールでお願いします。詳細については、
『鉛筆と銃』公式ホームページをご覧ください。
http://www.pan-dora.co.jp/enpitsutojyuu/#unit_screening

釧路と大阪（高槻）で報告会を開催！

◉11月19日に長倉代表の故郷釧路・道立釧路芸術館で『鉛筆と銃』の上映とともに報告会を開催しました。130名の参加者の中には長倉代表のお母様のお姿もありました。

◉2024年２月３日（土）には大阪・高槻にて報告会＆上映会を開催します（チラシ同封）。近隣のみなさま、ご参加を。
長倉代表が報告します。

写真カレンダー2024　好評発売中！

◉**壁掛**：2200円（送料込）
卓上：1400円（送料込）
＊卓上版は後でポストカードとしても使えます

◉**振込先**：下部記載の**ゆうちょ銀行口座**までお振り込みください。他行から振り込まれる場合は住所が通知されませんので、メールで事務局までご知らせください。

事務局より

◎長倉代表が第44回巌谷小波文芸賞を受賞しました。
青少年文化の向上に功績のあった方に授与されます。
過去には手塚治虫氏やまどみちお氏が受賞されています。

◎不要切手やや書き損じハガキのご提供をありがとうございました。
早速使わせていただいています。今後ともご協力をお願いいたします。

◎住所変更場合は、お手数ですがメールやハガキで事務局までご一報ください。

アフガニスタン山の学校の會

アフガニスタン山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会ったパンシール渓谷ポーランデ地区の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年4月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたって活動を続けてきました。その後2017年3月まで活動を延長。4月より第2期支援活動をスタートしました。

アフガニスタン山の学校だより　**ばあーる　2023年号・通算39号**

発行日：2023年12月17日　発行：アフガニスタン山の学校支援の会
〒187-0032　東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
【振込先】ゆうちょ銀行 振替口座　加入者名：アフガニスタン山の学校支援の会
口座番号：00160-1-667404
電話：070-3281-1180　E-mail ▶ info_ yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
編集・発行人＝長倉洋海　題字・イラスト＝近藤理恵　デザイン＝鈴木康彦
編集実務＝森 桂子　印刷＝藤田印刷株式会社